

ふるさと見て歩き

第6回

孝子無事衛門、節婦ヤスの墓



▶山方・常安寺入口にある大串無事衛門の墓（中央）

江戸時代、主君や親によく仕え孝養を尽くした者や夫に尽くし貞節を守った妻、農業に励み年貢上納に努めた農民など、藩や地域の領主が理想とした農民たちには、盛んに表彰が行なわれました。水戸藩も例外ではなく山方地域では二人の農民が記録に名をとどめています。

◇孝子 無事衛門、節婦 ヤス

無事衛門は十七世紀中頃、山方村に生まれ育ちました。幼少の頃から父母を敬い、その命を守り逆らうことがなく、学問に励みました。父の死後は年老いた母が快適に暮らせるよう孝養を尽くしました。季節によって寢床を変え、歩行の際には必ず付き添い、神社

仏閣や親戚へ行きたいというときは夫婦で仕事を休んで母に従い、すべて母の意に沿うように心を砕いたといいます。また盲目の兄にも父母同様に仕え、感心した村民は無事衛門に協力を惜しまなかったそうです。

同じ頃、野上村に百姓与次衛門の妻のヤスという者がいました。ヤスは舅姑によく仕え、農業にも精を出しました。与次衛門は病気になる身体が不自由となったため、ヤスに離縁して再婚を考えるよう勧めましたがヤスは反論し、一度夫婦となった上は離縁などありえず、ましてや姑を残して他へ縁付くなど考えられないこと、という強い意思を示しました。その後ヤスは事実上一家の柱となって農作業から家事一切をこなし、貞節の鑑となったと記されています。

無事衛門、ヤスともにその善行が北領巡視中の前藩主光圀の耳に入り、当

時の藩主綱條から褒美を受けることとなりしました。

江戸時代は、身分や家族関係の下位の者が上位の者を敬い、上位の者は下位の者を慈しむという儒教の教えが広められていました。二人の行いは模範的な農民像として称賛され、他の農民にも理想として示されました。

しかし一方、二人を褒め称える言葉の中には、そのような苦しい中でも「年貢を遅滞なく納めた」という旨の文言があり、孝養、貞節での表彰の前提には、苦境にも屈せず年貢を完納するという行為があり、それが重要な要素であったことが分かります。家を円満に治め相続していくことが、結果的に藩や幕府の秩序の安泰の基礎となるという思想があったことを示しています。

◇後世の評価

二人の孝子・節婦は近代に入っても度々思い起こされ、人々に強い印象を与えたようです。二家ともに断絶してしまいました。無事衛門家が断絶するのを惜しみ、一八八七（明治二十）年、当時の山方村長根本強は長女にその跡目を継がせ大串家を再興しました。また、ヤスについては、墓と推定される小塚があるだけでしたが、一九一五（大正四）年に野上青年会によつて諏訪神社（野上上町）境内に顕彰碑が建てられました。青年団

は、明治期の後半から大字や集落単位で組織され、地域に根ざした農村改良の担い手として機能しました。その一環として前代の奇特者を再評価し、農民としての修養を積み、共同体をまとめることが行なわれました。ヤスの碑はまさにその流れの中で姿を現したものでした。

これらの善行者の行跡を幕府が編さんした『官刻孝義録』には一七世紀後半以降の八、六〇〇人もの記録が残されています。残念ながら二人の記録は、それには載っていませんが、東野村、上小瀬村、野口村など市全域の農民の善行記録を見ることが出来ます。常陸国全体で、四四〇件余の記録のうち、現地域の善行者は六四件を数えます。身近なところに善行者がいたかもしれません。

このような孝行や貞節を現代の皆さんはどのように評価されますか？

（歴史民俗資料館）



▶野上・諏訪神社境内のヤスの顕彰碑